

令和3年度 東国文化自由研究レポート

研究テーマ

「上毛野国が東国一の大国といわれる理由と、
古墳の繁栄から終焉までの群馬の古代史について」

群馬大学共同教育学部附属中学校

3年4組 白石桃杏

1 研究の目的

群馬が東国文化の中心として繁栄した背景には、どんな物語があったのか。以前から興味があった古墳の存在と故郷の古代史とを併せて学びたいと思ったから。

2 調査方法

群馬県立歴史博物館にて行われている第103回企画展「古墳大国群馬へのあゆみ」及び常設展を見学し出土した実物の副葬品や書物から調査する。

東国文化についての書籍を閲覧し、文化が発展した背景と群馬のルーツについて調査する。

実際に古墳を見学し、大国としていち早く仏教文化伝来があったことを調査に行く。

3 調査結果

1500年ほど前に、古墳時代から奈良時代にかけて現在の関東地方で栄えた文化を**東国文化**という。当時、東国文化の中心地として栄えたのが群馬であった。その理由は**ヤマト王権**とのつながりが大きい。ヤマト王権とのつながりと、古墳の築造と出土した副葬品からわかる群馬のルーツについて調べてみた結果を下記にまとめた。

当時、日本の中心は**※1ヤマト王権**があった奈良や大阪であった。ヤマト王権は列島統一を目指し、そのために最も重視したのが東国であった。この地を蝦夷征討の前線基地とする目的もあったと考えられている。

ヤマト王権が重視した理由

- 理由1** 自然環境の豊かさ。とくに群馬は山に囲まれていて幾筋もの川が平野に流れ込み、農業にとって最も大切な肥沃な土壌と豊富な水を供給した。大勢の人々を養う事ができた。
- 理由2** 原動力となる馬が群馬では沢山飼育されていた。馬は4世紀末から5世紀初め頃に朝鮮半島から伝えられた。同時に乗馬の風習も伝わり、上質な馬を畿内へ供給するようになった。
- 理由3** 上記の理由から有力な豪族が現れた。豪族は朝鮮半島や大陸との交流、灌漑用水を利用した大規模な農業を行い、ますます勢力を拡大した。ヤマト王権はその豪族と同盟を結び、関東、東北をおさめるための足掛かりとしようとした。

※1ヤマト王権とは：3世紀中頃から後半、大和地方（現在の奈良県付近）の有力豪族が協力してヤマト王権という連合政権をつくった。ヤマト王権は**氏姓制度**を取り入れて豪族を組織化し、支配力を強めていった。

ヤマト王権では**権力の象徴として巨大な前方後円墳が作られた。**

馬による交通が発達しはじめた古墳時代。群馬は日本列島の西と東をつなぐ交通の要となった。こうしてヤマト王権と強く結ばれた群馬は東アジアの先進技術や文化がいち早く伝来した。

このことは古墳から出土した**※2副葬品**から見て取れる。

群馬県内では3世紀から7世紀にかけて**14000基以上の古墳**がつけられたことがあきらかになっている。その中から、**綿貫観音山古墳（高崎市）**、**前橋天神山古墳（前橋市）**、**総社二子山古墳（前橋市）**から出土した副葬品についてまとめた。**※2副葬品**とは遺体とともに埋葬された銅鏡や装身具、刀、甲冑、土器などの品々のこと。

群馬県立歴史博物館では9月5日まで企画展「古墳大国群馬へのあゆみ」を公開している。

常設展示では**綿貫観音山古墳（高崎市）**から出土した副葬品や埴輪を展示しているので、ここで見学した内容と書籍にて調べた内容を記述する。続いて古墳の終焉と群馬の古代史についてまとめた内容を記述する。最後に宝塔山古墳見学について記述し、考察にする。

（写真は群馬歴史博物館にて展示の様子を撮影したものと、同館出版本に載せられていたものを引用。）



※下記指定文化財のうち、国宝には●、国指定文化財のうち、令和2年3月19日に国宝答申された綿貫観音山古墳出土品には★をつけた。



① ●三角縁五神四獣鏡（前橋天神山古墳、古墳時代前期）

前橋天神山古墳から出土した三角縁五神四獣鏡はヤマト王権との強い絆の証として各地の豪族に配布された鏡だと考えられている。東日本では17枚しか出土してない中、群馬では12枚も出土している。

前橋天神山古墳は4世紀の建築当時では東日本最大級の前方後円墳であり、古墳時代前期を代表する。1966年群馬大学が発掘調査を実施した。鏡のデザインは、円圏を伴う4つの乳で分割した中に交互に複数の神像、獣像が並んで配置されている。鈕座寄りにも円圏を伴う小乳4つが配置されている。

獣像は、顔は正面に、体は互いに向き合った形で、左に龍、右側に虎が表現されている。古代中国では東方に青龍・西方に白虎・南に朱雀・北に玄武（げんぶ・亀のこと）と四神の囲みの中に生きているという宇宙観があり、これを四神思想と呼んでいた。この考え方は、その後朝鮮半島を経由して古代の日本にも伝わり、有名な高松塚の壁画にも描かれた。

出土した鏡は、邪馬台国の卑弥呼が中国から賜ったとされる銅鏡と関係を持つ形で作られており、畿内との強い結びつきを感じる。



② ★銅水瓶（綿貫観音山古墳、古墳時代後期）

銅水瓶（どうすいびょう）は、古代インドの土器に由来し、仏教の伝播とともに中国に伝来している。綿貫観音山古墳の銅水瓶は、横穴式石室の玄室東壁沿いに須恵器・土器と共に蓋をした状態で置かれていた。

東アジアでは、中国の北魏や東魏、北齊の墳墓への副葬例がある。山西省の北齊代の庫狄迴洛（こてきかいらく）・夫人合葬墓出土例が、本体のピンセット状落下止めのある蓋など、綿貫観音山古墳例と類似点を多く持っている。日本列島における類例としては、東京国立博物館所蔵の伝・近畿地方出土品、法隆寺伝世品、静岡県沼津市宮下古墳出土品等があるが、古墳出土品で完形の銅水瓶は綿貫観音山古墳の例が唯一である。

蓋を含めた総高は31.3cm。内、外面の特徴により鑄造（ちゅうぞう）と考えられる。表面のほとんどは靑緑に覆われ、頸部、胴部、台脚部など地金が見える部分は、整形のロクロ挽きによる線状の痕跡が見られる。

底には小孔が見られ、制作時の回転による整形に必要な芯棒を通すためのものとされている。蓋は上部に疑宝珠状の鈕、裏には蓋の落下防止を意図した銅板がピンセット状に取りつく。



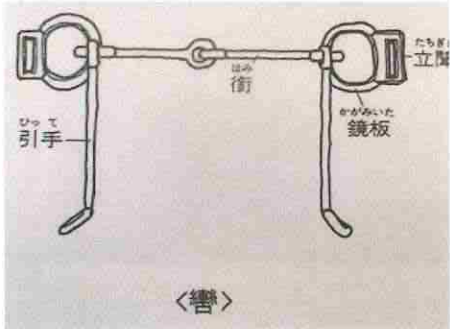
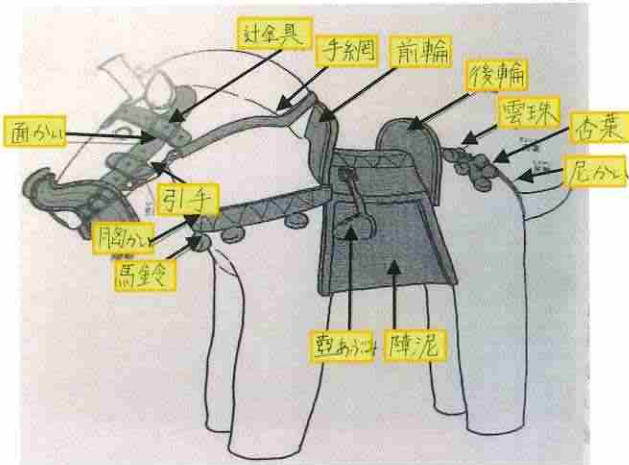
③ ★装飾馬具（綿貫観音山古墳、古墳時代後期）

古墳時代、馬の普及に合わせ、数多くの馬具が古墳に埋葬されるようになる。その中には、鉄製の実用品のほかに、金銅や銀を用い、細かな細工の施されたきらびやかな装飾馬具が見られる。

6世紀後半、古墳時代の隆盛期につくられた綿貫観音山古墳から出土したものを写真と一緒に次項に解説する。

※弥生時代における水稻稲作の展開は、各地に農業集団としてのムラを出現させた。ムラはやがて階級的組織を整えてクニへと発展する。クニには権力をもつ首長がいてこれを治めた。首長たちは死ぬと、共同墓地とは違い、地域的に特色ある首長墓が造られるようになった。3世紀後半、4世紀初頭、巨大で墳丘を持った前方後円形の古墳となって日本各地に出現する。古墳文化時代のはじまりである。

馬具の構成



★金銅環状鏡板付轡 (こんどうかんじょうかがみいたつきくつわ) 馬の口にかませて馬を制御するための金具で、口にかませる銜 (はみ)、銜の両側につく鏡板、手綱を取り付けるための引手 (ひって) などからなる。通常は鉄製であるが、本例は金銅製であり大変貴重である。



★鉄壺鐙 (てつぽあぶみ) 鞍から下げた乗り手の足掛け。足掛け部分が輪になっている輪鐙と、爪先部分を覆った壺鐙とがある。金属製壺鐙は、6世紀後半に導入され、奈良時代まで制作が継続される。本壺鐙はその初期に位置づけられる。



★金銅歩揺付雲珠・辻金具 (こんどうほようつきうず・つじかなぐ) 繫、帯が交差する部分に用いる金具。意匠は蓮のつぼみを表現したものとみられ、蓮の意匠を多用する仏教芸術との関係性がうかがわれる。



★金銅心葉形杏葉 (こんどうしんようがたぎんよう) 胸繫や尻繫に下げた飾金具。施された唐草文は中国南北朝時代に発達した仏教芸術からなるものである。法隆寺の玉虫厨子 (国宝) の※2須弥座飾金具や金堂四天王像 (国宝) 宝冠などの意匠につながる。
※2須弥座・・・台座のこと。玉虫厨子を支えるため四隅に木の角柱を立て、板をはめ込んでいる。



★**銅三環鈴（どうさんかんれい）** 円形の環の外周に3個の鈴をつけたもの。馬具と一緒に出土することから馬具の一種と推定される。青銅製で、鈴と環は同時に鑄造されている。鈴の内部に鈴子として小石が入っている。



★**金銅歩揺付飾金具（こんどうほようつきかざりかなぐ）** 方形や菱形の金具で、帯などを飾った。雲珠・辻金具と一体となり馬装を構成していたと考えられる。歩揺は、8本吊手の飾金具に先が尖る蓮華弁形のもの、6本・3本吊手の飾金具には雨滴形のもが飾ってある。6世紀後半から7世紀前半に属する。

↓ 馬具以外にも大帯、装飾具には耳環（じかん）・空玉（うつろだま）・ガラス玉・獣帯鏡などが出土。



←★**金銅鈴付大帯（こんどうすずつきおおおび）** は全国に3例しかない希少品。

綿貫観音山古墳の他には、藤ノ木古墳（奈良県）と山王金冠塚古墳（群馬県）に類例がある。このうち、鈴の付く豪華なものは、綿貫観音山古墳の1例のみである。



←★**獣帯鏡**。綿貫観音山古墳からは韓国百済の武寧王陵出土鏡と同型の獣帯鏡が発見されており、群馬の横穴式石室を有する前方後円墳を代表とするものとされる。



④**裝飾大刀（たち）（総社二子山古墳、古墳時代後期）**

5世紀になると、中国、朝鮮半島の影響を受けた金・銀・金銅などで飾られた儀式用と考えられる大刀が多く見られるようになる。その中には柄頭が龍・鳳凰・獅子などのモチーフで飾られた環頭（かんとう）大刀、先端が拳状にふくらんだ頭椎（かぶつち）大刀、角ばり山形状の圭頭大刀、丸みをもつ円頭大刀などがある。これらは裝飾大刀と呼ばれ有力豪族がいたことを示す。

総社二子山古墳（前橋市）より出土した裝飾大刀（復元品）。剣はすでに消失しているため、模写図が貴重な資料として残っている。

毛野の地を支配した豪族は、どのような人たちだったのだろうか。「日本書紀」では、上毛野氏とされる氏族を記し、その遠祖として、崇神天皇の第一皇子、豊城入彦命をあげている。

毛野の地に政治的社會が成立したのは、土器文化が成立し、繁栄した4世紀中頃のことと推定される。この土器文化は、水稻稲作に卓越した北関東の利根川とその支流の平坦地に生活の基盤を置き、生産を伸ばすと共に、畿内など先進地域において既に培われていた氏姓制度などを採用することにより、急速に階級組織を確立したと思われる。毛野国（けめのくに）の成立である。

総社二子山古墳は明治2（1869）年、「豊城入彦命」（とよきいりひこのみこと）の御墓であると伝承をまとめ、政府に申請したが、群馬・栃木の御墓を全て調べてみないと※3陵墓として認められないとの回答であった。現在も調査中である。

豊城入彦命は毛野国（現在の群馬県・栃木県）の創始者とされる。日本書紀では2代目として八綱田王をあげているが両者とも毛野の地に居住したとは記していない。3代目の彦狭嶋王については上毛野国に埋葬されたとあるが、そこに居住し死去したとは書いていない。

伝承上、毛野地域に最初に赴任したのは、4代目の御諸別王とされる。御諸別王は、蝦夷を平定し東国の地を良く治めたと記されている。その後、豊城入彦命の4世孫に荒田別・鹿我別の存在を記し、彼らが將軍として朝鮮半島へ出兵したことや、対外交渉に携わったことを伝えている。

これらは伝承に基づくものである為、そのまま事実とは考えられないが、毛野の地が農地として開拓され、政治的社會組織が形成され、古墳が出現した背景には畿内などの先進地域からの人の流れがあったことを想像させる。

★崇神天皇は後継者を決めるにあたり、兄・豊城入彦命と弟・活目尊（いくめのみこと）にそれぞれの見た夢を語らせた。兄は「自登御諸山（三輪山）向東、而八廻弄槍、八廻撃力」と述べたのに対し、弟は「自登御諸山之嶺、繩紐四方、逐食粟雀」と述べた。

兄「東に向かって槍や刀を振り回す夢を見た。
弟「御諸（三輪）山へ登り、四方に縄を張って雀を追い払う夢を見た。」

崇神天皇は兄を東国地域の平定へ向かわせ、弟を後継者とした。ヤマト王権にとって、皇位継承と東国経営は軽重の比較が必要ないような同等の重要案件であったことがわかる。

※3陵墓「陵墓の定義」について、昭和22年法律第3号の「皇室典範」第27条において制定されている。

「天皇、皇后、太皇太后及び皇太后を葬る所を陵、その他の皇族を葬る所を墓とし、陵及び墓に関する事項は、これを陵籍及び墓籍に登録する。」

すなわち、通常は「陵墓」という1つの単語のように使用しているが、「陵」は陛下という敬称の方「墓」は殿下という敬称で呼ばれる方を埋葬する場所であると区分されている。

現在の陵墓は899を数え、1都2府30県に所在している。明治期の豊城入彦命墓の治定をめぐる動きにより群馬県にも明治初期のわずかな間だけ陵墓が存在していたことになる！

上記に挙げた古墳の副葬品、鏡、玉、刀、馬具、須恵器などの小道具は祭祀の遂行者としての王の所有物とされる。当時の最先端をいく朝鮮半島の新羅・伽耶・百済で制作された品物や、その系譜を強くひくものが多い。このような目立った特徴は、綿貫観音山古墳だけに限らず、同じ時期の利根川中流域・烏川下流域の有力古墳にも同様の特徴を見ることができる。先に紹介した金銀装頭椎大刀が出土した、総社二子山古墳をはじめとし、綿貫観音山古墳と同じ榛名山噴火の角閃岩安山岩の加工材を使用し特徴的な横穴式石室を共通にしている。

このような共通点は、綿貫観音山古墳とその周辺地域一帯の首長層が、政治的にも強く結束していた事がわかる。また、山王金冠塚古墳（6世紀後半、古墳時代後期）から出土した※4金銅製冠や八幡観音塚古墳（6世紀末、古墳時代後期）から出土した※5銅鏡などの朝鮮半島系遺物から大陸間にもネットワークを築いていたことがわかる。



※4 金銅製冠（復元品）



※4 金銅製冠

※4 「出」の字のような形状の立ち飾りを持つ新羅系の冠。このタイプの冠は列島唯一の例である。韓国の慶州の古墳で出土した冠や、新羅の王陵である皇南大塚、天馬塚、瑞宝塚、金冠塚などから見つかった冠とも類似する。



※5 承台付銅鏡



※5 銅鏡

※5 青銅器の器。脚や蓋、受け皿まで付く高級品。非常に洗練された完成度の高さがうかがわれる。

しかし、古墳時代は、八幡観音塚古墳を最後の前方後円墳とし終焉する。と同時に、金銅仏や銅塔を荘厳化するための様々な器物、装飾具が生み出された飛鳥文化と称される新たな時代の到来となる。

続いて古墳時代終焉に至るまでの流れを群馬の古代史と共に下記にまとめた。

こうした毛野の連合政権は、古墳に副葬されている石製模造品や銅鏡などから、かなり独自の政治的主権と文化をもった独立した大国とみられる。ヤマト王権はこうした毛野の連合政権の存在を認め、友好的な同盟関係で結ばれていたようである。しかし、5世紀前半の大和朝廷内部の深刻な対立は天皇家の衰退を招いた。これを克服しようとした雄略天皇は、5世紀後半の中頃からヤマト王権の安定化をはかり、経済的基礎を強化し確立する為に東国への進出を企てたようである。こうしたヤマト王権の東方政策の変更は、これまでの毛野の連合政権とヤマト王権とのゆるやかな同盟関係を清算し、毛野の連合政権はヤマト王権の中に組み込まれることとなる。

6世紀前半、上毛野国には屯倉（みくら）が置かれた。この事はヤマト王権の東国進出により政治の機構の中に、取り込まれていったことがわかる。上毛野国（かみつけの）の成立である。そして、在地の首長達は、ヤマト王権の地方の官人となり、ヤマト王権を支える有力氏族へと成長する。

この頃を機に毛野地域の古墳は大きく変容する。これまでは権力を誇示するかのように厳然と存在していた古墳や墳群の多くは衰退の途をたどりやがて消滅する。いままで古墳があまり造られなかった地域である赤城南麓、榛名山の東南麓、井野川流域、碓氷川流域などに、横穴式石室を伴った後期大型前方後円墳が続々と登場する。

なぜか？

これまで群馬を中心とした東国はヤマト王権の政治的・文化的影響を受けて、独立的な地方政権として華々しく成長してきた。成長を支えてきた各地の首長たちは、ヤマト王権の強力な介入により権力を限定され衰退する。権力を維持する為に、ヤマト王権に結び付き、それを支える氏族へと成長していった。このことが4世紀頃（古墳時代前期）に造られた古墳の衰退につながったと考えられる。

赤城南麓や榛名山の東南麓などで新たに領域支配を確立し、飛躍的な成長を成し遂げた新しい権力者の出現により、古墳は古墳時代後期へ引き継がれていく。

古墳時代後期（6世紀以降）は上記の社会的変動を反映して大きく変容する。竪穴系の埋葬施設から横穴式石室

への転換である。横穴式石室は広い空間を有する石室に、外部と結ぶ通路を設けた埋葬施設で、家族墓として成立・発展した中国墓制の影響によって出現したものとされる。

群馬への伝播は、比較的初期の段階において大型前方後円墳から小円墳にいたるまで古墳造営の各階層の間に広く受け入れられたようである。首長たちは競って、巨石による巨大な横穴石室を構築することとなる。この時期、副葬品は馬具や須恵器を加えて豊富となる。綿貫観音山古墳がそれである。

大化の改新後、中央集権の政治体制が確立すると、上毛野国を支配していた上毛野氏は、都に移って中央政府の役人となり、外交や文化の面で活躍した。一方、上野国には中央から国司が派遣され、その国司によって治められるようになった。こうした7世紀中頃以降における中央集権国家確立への動きと仏教文化の伝来により権威の象徴が古墳から大寺院へと移っていった。

8世紀初頭に国司として赴任した益人がどのような施策をしたのか不明であるが、国名の変更が行われた。

上毛野国（かみつけのくに）から上野国（こうずけのくに）と、「毛」の字は削除しても読みには「毛」が残るむしろ野が省略されて、上野と書いてもコウズケと読むようになったのである。

律令体制下において全国60余国は畿内と東山、東海、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道に分けられた。上野国は、近江・美濃・飛騨・信濃・下野・陸奥・出羽などの国とともに、東山道（古代の官道）に所属した。東山道は、信濃国から碓氷の坂を越えて上野国へ入るが、上野国には坂本・野後・群馬・佐位・新田の5つの駅家が置かれた。律令政府がその政策を遂行する為に重要な道路であり、上野国は蝦夷経営の拠点、前進基地の役割を果たした。

仏教文化の伝来

6世紀中頃、わが国へ仏教が伝来するが、受け入れをめぐり対立がおこっていた。

推古天皇の時代には全国での寺院の数46か所、僧816人、尼569人、併せて1,385人。

持統天皇の時代には寺院の数545か所。

天武天皇の時代には僧尼の数2,400人。

7世紀の後半以降、仏教は急速に全国に広まった。関東地方でも寺院建立の動きが活発となり、現在に残る古代寺院跡は70か所以上ある。このうちの約30%は群馬地域のものであり、古墳文化に引き続いてこの地が東国の文化的中心地だったことを物語っている。

群馬への仏教文化の影響は、7世紀に造られた宝塔山古墳（前橋市）の石棺の底部側面の装飾に「格狭間」（こうざま）とされる仏教的な技法が採用されたり、桐生市新里町にある中塚古墳の奥壁が左右対称に構築されたり、その影響がはっきりあらわれてくる。

やがて思想の上でも影響を及ぼすようになる。それは古墳に代わる埋葬施設としての火葬墓の出現である。火葬は、文武天皇の700年、道照和尚にはじまるとされるが、こうした葬法はたちまち群馬の地にもひろまり、奈良時代から平安時代にかけて、赤城山南麓や榛名山東南麓地域を中心に各地に火葬墓が造られた。火葬墓は、死骸を火葬にした後、その遺骨を須恵器などの容器に入れて葬ったものである。新里町を中心とした赤城山南麓や榛名山東南麓地域では、武井廃寺跡にみられるように、その容器をさらに石製蔵骨器（石櫃）に納めて埋葬したものがある。石製蔵骨器の形やその埋葬方法には、古墳時代の埋葬の名残が見られ、火葬とする新しい葬法がとられたにもかかわらず、その埋葬法には古墳文化の伝統も残ったのである。

仏教の死生観



死は肉体と靈魂との分離とされ、肉体は"なきがら"として扱われ焼くなどの方法で処理されたが、肉体から分離した靈魂は仏の世界に安住するとされた。そして靈魂の安住する所として、寺院が建立され古墳時代は終焉する。

畿内勢力の進行の中心に据えられた仏教は、蘇我氏の覇権確立とともに隆盛し、飛鳥時代の壬申の乱後の武力的政権によっても引き継がれていく。

やがて奈良時代にはいり、各地で寺院が急激に建立されていくことになる。高崎市東国分寺町にある上野国分寺跡には60.5mの高さになる（全国の国分寺の中でも最大級）七重塔が建てられ「国の華」と称えられた。

古墳時代に引き継ぎ最先端の技術や文化を取り入れ東国文化をリードした豪族の姿を見ることができる。その後、律令体制も、平安時代の中頃以降、藤原氏による摂関政治や院政によって次第に崩れ、これに伴って地方の情勢も大きく変化した。10世紀に入ると社会不安は一層ひろまり、武装集団、あるいは国司と武装集団との対立が目立ってくる。上野国でも国司が殺害される事件がおこった。そして下総国を中心にして東国全域をまきこんで平将門の大反乱が発生した。将門は武蔵権守興世主、常陸の豪族藤原玄明らと結び、常陸国府を襲い占拠し、ついで下野国・上野国など各国を支配した。上野国を攻めた将門は国印を奪った。そして上野国府に入り、八幡大菩薩の託宣を受けて新皇を称し、東国の国司などの人事を決定し、中央政府に公然と敵対する地方政権を樹立した。しかし、中央政府の支援を受けた平貞盛・藤原秀郷らの攻撃の前に崩れ去った。この事件は武士集団の成長を示すものだったが、兵火により多くの民家が焼かれるなどと共に東国社会の荒廃も一段と進んだ。

11世紀に入り、東国は戦乱と飢饉により人民は疲弊・困窮していた。上野国では飢饉のため1年間の免税を許可された。加えて、1106年（天仁元年）浅間山の大爆発があった。事実、発掘調査の結果として、前橋などの県の中央部においても、その時の火山灰とみられるものの堆積が数cm認められるという。この噴火も亡弊の状況を一層深刻なものとしたと考えられる。

こうした中、これまで律令体制を支えてきた公領は、保、御厨、荘園に転換することが進んでいた。この3者は現地における"開発領主"が開発した私領を、中央の貴族・大寺社に寄進し、これを基礎にしてある領域を国司や中央権力が承認することによって成立したものである。

上野国には・・・

<p>新田郡全域→新田荘 利根郡→土井出・笠科荘、隅田荘 邑楽郡→佐貫荘 佐波郡→瀧名荘 多野郡→多胡荘</p>	<p>御厨→園田・須永・青柳・玉村 ・高山・邑楽御厨</p>
	<p>保→大倉・山上・白井 河田保</p>

上記のように、荘園、御厨、保がつくられた。

このように亡弊をもたらし、土地制度を変化させた原動力は、律令制度の支配と収取に抵抗した農民の力と武装集団として成長した武士の力であった。ここに古代社会は終焉の時をむかえる。上野国も例外ではなかった。荒廃の中に上野国は東国の雄国として突き進んでいく。

4 結果1

出土した副葬品は金銅製や鉄製の馬具や装飾付き大刀（たち）など地位や財力を視覚的にわからせるものが多い。馬を沢山所持し、飾りをつけられるだけの有力者がたくさんいた事が考えられる。

大刀は大きく重そうな見解から、実用性よりも装飾を施し見た目を重視していたことが読み取れる。これらは当時最高水準の工芸技術であったことから、金銀に馬具や大刀をもつことが権威の象徴とされていたと推測する。

また、これらの品々はヤマト王権により制作・配布されたとされるが中には朝鮮半島や中国大陸の最先端技術や文化の影響を受けていることがわかる。出土した水瓶、銀装の大刀、金銅製の馬具など、装飾された技術は、中国南北朝時代に仏教芸術が開花した時代のものであり、大陸、上級王家との繋がりを見通すことができる。

群馬県内には14000基以上の古墳があったことが明らかになっていることから「東日本最大の古墳県」であり、副葬品の豊かさと華麗さは先進地の古墳と言える。辺境地の後進性ではなく、ヤマト王権や東アジアからも重要視されていた事がうかがえた。

自然環境の豊かさ、大陸からの先進技術、ヤマト王権とのつながりなどの条件が揃い、群馬県域は「上野国」（こうずけのくに）と言われ、全国68ヶ国のうち13国しかない大国として繁栄していたことがわかった。

5 宝塔山古墳見学

実際に前橋市元総社町にある宝塔山古墳へ見学へ行った事を下記にまとめる。

宝塔山（ほうとうざん）古墳は、7世紀後半（飛鳥時代）に造られた一辺約60m、高さ約12mの大型方墳。埋葬施設が竪穴式石室や粘土槨などの竪穴系の埋葬施設から横穴式石室へと転換しているので古墳時代後期のものだ。

横穴式石室は、大陸の墓制が朝鮮半島を経由して伝来され、広い遺骸を納める玄室と、外部からの通路である羨道（せんどう）から構成される。宝塔山古墳は羨道と玄室の間に前室をもつ珍しい複室構造。さらに珍しいのは玄室に安置された家形石棺の底部。「格狭間（こうざま）」という台の脚のようなくりぬきは、仏具と共通する。



いざ！



あれ・・・頂上に石室はないの・・・？



石室入口

※石室への入口は階段がある正面から裏側へ回った所がありました。



石棺の下に格狭間を確認！



※中は暗いのでランプが必要です。

入口から玄室をみた様子。壁面には「漆喰（しっくい）」という白い塗料がぬられている。

高度な石材加工技術「截石切組積（きりいしきりくみづみ）」



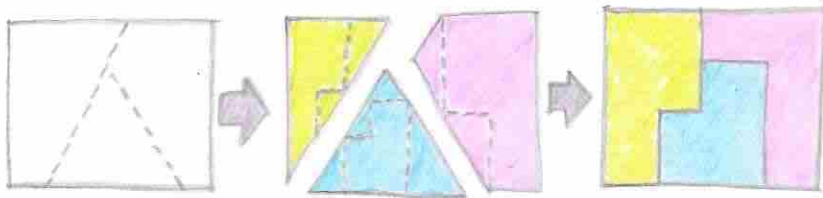
壁面の様子は、石材を四角形やL字形に加工して組み合わせる高度な技術が使われている。



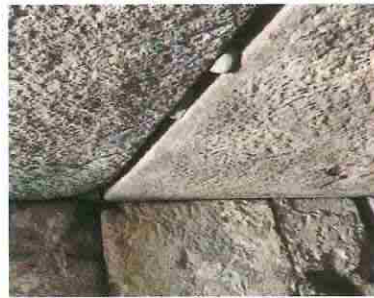
壁面アップ。
紙一枚入らないほどぴったりと精巧である。

まず1枚の紙を適当に3つに折る。その3枚で、角が直角になるように四角形やL字形に切って組み合わせる。なるべく大きい長方形（正方形）に作り直す。

紙をL字型に切って組み合わせる。



个玄室の隅には小石が転がっていた。



个天井にのせられた石は幅が2m×縦1mくらいあった。とても大きい。首長たちが競った証だ。

古墳の頂上からの眺め



※写真1

←※写真1 北には赤城山とその裾野を見ることができる。

→※写真2 東南の方角は群馬県庁を見ることができる。



※写真2

古墳の外周の様子



※写真3



※写真4



※写真5

↑※写真3 外周には堀があったとされる。

※写真4 外周の通り沿い北西には前橋市指定文化財、光巖寺薬医門。

※写真5 古墳の道をはさんで北側には総社藩主秋元氏の菩提寺。秋元氏は灌漑用水として天狗岩用水を領民に掘らせた。

5 結果2

古墳を使用する葬法が一部特権階級のものでなく社会一般の葬法になってきたこの頃、構造的にも技術的にも優れた新しい石室をもつ古墳が出現したことがわかった。截石切組積石室である。上毛野国の支配体制の再編成がなされ新たな権力者の台頭を意味するものだろう。

石棺の底部分側面の装飾に「格狭間」とされる仏教的な技法を見ることができた。仏具の脚のような造りになっていて、群馬への仏教文化の影響を確認できた。

頂上からの見晴らしは3階建ての屋上から見渡しているような感覚だった。当時、ほかに高い建物がなかったとされるから、かなり遠くまで見渡せたであろう。通行人が方角を知るための目安にしたかもしれない。

6 考察

今日に多くの文化遺産を残すこととなったのは、ヤマト王権とのつながりが深く東国文化の中心地であったことから、大陸の文化が早く伝来し栄えたことによるものである。

・前期古墳時代の古墳からは、王の所有物とみられる副葬品が多く出土しており、巨大な権力者を埋蔵したものであると考えられる。

・後期古墳時代は、古墳が一般階級人にも用いられ、新たな技術・構造となっている。これは仏教伝来の影響と、支配体制の変化を示すものであろう。

ここで、近現代の群馬県の古墳調査の発展に尽力した人物を紹介したい。

・戦前→明治7年、群馬県令となった楫取素彦は、豊城入彦命の陵墓探索のため、総社二子山古墳を始め、全県の古墳調査を行った。

・戦後→戦後のわが県の古墳研究の礎となったのは、群馬大学の尾崎喜左雄先生とされる。

相次ぐ各地の開発工事より、遺跡消失の危機を感じ、県内300基以上の発掘調査を行い、文化財の保護規定の成立に従事、それらの活動は現代考古学の幕開けとなった。

今後の発掘・研究の発展は、私たちの世代が彼らの意思を継承し、後世に繋がることを期待したい。

参考文献

新しい社会歴史（東京書籍） 古墳大国群馬へのあゆみ（群馬県歴史博物館） 綿貫観音山古墳のすべて（群馬歴史博物館）
東国文化副読本（群馬県歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会） ぐんま東国文化ものがたり（群馬県）
古代上毛野をめぐる人々（岩田書院） 古代上毛野の地勢と信仰（岩田書院） 群馬の古代史（みやま文庫）
群馬の古墳物語（上巻）、（下巻）（上毛新聞社）

おう ぼ ひょう <応募票> さくひん さいご ここにのりをつけて、作品の最後のページの下に貼ってください した は

テ - マ	上毛野国が東国一の大国と言われる理由と、 古墳の繁栄から終焉までの群馬の古代史について
氏 名 <small>し めい</small>	(ふりがな) <small>しろいし もあ</small> 白石 桃杏
学校名・学年 <small>がっこうめい がくねん</small>	群馬大学共同教育学部附属 <small>がっこう</small> 学校 3 年